

科学と創造



科学と創造

「初めに、神は天と地を創造された。」 **創世記 1:1**

科学者たちは、宇宙の広大さと複雑さについて、ますます多くのことを学び続けている。

彼らの多くは、探求すればするほど、そのすべての壮大さの背後には、至高の知性を持つ創造主がおられると確信するようになっていることを率直に認めています。これは、はるか昔、預言者ダビデにとっても明らかなことであり、彼は次のように記しています。「天は神の栄光を語り、大空は御手のわざを現す。日ごとにその声を響かせ、夜ごとにその知識を伝える。」（詩編19:1,2）

預言者イザヤは、神が「地を造られた……神はそれをむなしく造られたのではなく、人が住むために造られた」と私たちに保証しています（イザヤ書45:18）。明らかに、神は人が住むために地を造られたのです。創世記の創造の記述は、地の主な住人が人間であることを明らかにしています。

私たちの最初の両親を創造されたとき、神は彼らにこう言われました。「生めよ、増えよ、地を満たせ〔ヘブライ語では「満たせ」〕。地を治めよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」

（創世記1:28）。しかし、この嗣業を完全に受け継ぐためには、人間が神の律法に対する忠誠を証明す

る必要があった。アダムはこれに失敗し、死の宣告を受けることとなった。

これは、神の御計画が失敗したことを意味するものではない。聖書は、キリストを通して、神が墮落した人間のために

な贖いを備えられたことを明らかにしている。「アダムにおいてすべての人が死ぬのと同様に、キリストにおいてすべての人が生かされる。」

（コリントの信徒への手紙一

15:22）。人間は不従順の状態から救い出され、創造主が用意してくださった素晴らしい住まいに住むにふさわしい者であることを証明する機会を与えられる。地球は、死に向かっている人類ではなく、完全な命に回復され、不従順の悲惨な結果を経験を通じて知り、それによって罪から守られた人類によって、完全に満たされることになる。

死んだ者や死にかけている人類を回復するというこの偉大な計画は、聖書において「復活」という言葉で表現されている。また、ペテロはこれを「回復の時」と呼び、それは世界の初めから神の聖なる預言者たちによって語られてきたものであると述べている。 （使徒言行録

3:20,21）。聖書の冒頭の章が、創造と人間の墮落に関する本質的な事実を述べているのと同様に、聖書の残りの部分もまた、地を治めるために創造された者たちを回復するという創造主の計画を明らかにしています。

科学と創造

聖書が、私たちに対する神の計画の啓示であることを、地球に関する多くの本質的な事実をいかに正確に記述しているかを理解すれば、聖書への信仰はさらに深まるはずです。例えば、古代の人々は地球が平らであると信じていましたが、現在では地球が球体であることが確立されています。この事実は、3,000年前にヨハネの黙示録で言及されていました。イザヤ書には、「地の円」について記されています。イザヤ書40章22節

インドの古代の賢者たちは、地球が亀の上に立つ象の背中に支えられていると教えていました。ギリシヤ人はその偉大な知恵で知られていましたが、彼らが導き出した最良の説は、地球がアトラスの背中に乗っているというものでした。聖書は、人間の知恵によってそれが発見されるはるか以前から、この点に関する真理を宣言していたのです。

預言者ヨブは、創造主について次のように語った。「主は北を虚空の上に広げ、地を何ものにも支えられずに懸けられる。」ヨブ記26:7

地球の土台

創造主はヨブにこう尋ねました。「わたしが地の基を据えたとき、あなたはどこにいたのか。もし理解があるなら、語ってみよ。」

さらに、「その土台を支えているのは何であり、その礎石を据えたのは誰か」（ヨブ記38:4,6）とも問いかけた。現在確立されている地質学的真実に照らす

と、これらの問いは地球の形成における明確な特徴を指しているように思われる。人間の住むこの地球には確かに「土台」があり、それは地球の中心核を形成すると考えられている、ニッケルと鉄からなる固体塊の上にしっかりと築かれているのである。

地球の「礎石」は、ピラミッドの「主たる礎石」に多少似ているが、頂上にあるのではなく、中心にあるという点で異なる。したがって、地球の全重量がその中心核に押し付けられているのである。

『地球の形成』（『現代知識百科事典』192、193ページ）の中で、J・W・グレゴリー教授は、地球の上部地殻を支える7つの巨大な基盤について言及しています。それらは北米、南米、アジア、アフリカ、オーストラリアにあり、ヨーロッパには2つあります。

海は莫大な重量を持つものの、重い玄武岩質の地盤によってしっかりと支えられているが、主は大陸に対してさらなる支えを用意してくださった。詩編の作者が創造主について、「主は世界をその土台の上に据え、決して揺らぐことのないようにされた」と記したのも不思議ではない。（詩編104:5）

寸法

神はヨブに、地球に関するもう一つの重要な問いを投げかけられました。「もしあなたが知っているなら、誰がその寸法を定めたのか。あるいは、誰がそれに測り縄を張ったのか。」（ヨブ記38:5）。建築家が建物を設計する際、寸法は極めて重要です。建

科学と創造

物自体が適切な比例の寸法を持つだけでなく、それらは周囲の物体や状況と調和していなければなりません。

地球の設計も同様であった。偉大なる建築家は、その設計の目的にふさわしいあらゆる点で適切な寸法を選ばれた。地球の直径は約8,000マイルである。この寸法の重要性は、月という小さな天体や、木星や土星といったはるかに大きな天体と比較して初めて理解される。

地球の海洋は、地球がまだ高温の塊であった形成初期の段階で放出された水蒸気によって形成されたと考えられている。したがって、地球の直径は、その表面積に対するこの水蒸気の量を決定づけることになる。一方、月の場合、はるかに小さいため、ガスから生じた水の量はごくわずかであり、月が冷却されるにつれて完全に蒸発してしまい、その結果、月には水が存在しない。

一方、科学者たちは、木星や土星ほどの大きさの惑星は、

膨大な量の水蒸気を放出したため、その陸地は水や氷の深い層の下に完全に沈んでいると説明しています。地球が人間にとって居住可能な場所となるためには、適切な大きさでなければならず、神なる設計者はその寸法がどうあるべきかを熟知しておられました。

また、地球が適切に暖められつつも過度に熱くならないためには、太陽からの距離も丁度よいものでな

ければなりませんでした。太陽は地球から約9,300万マイル離れています。

科学者たちは、もし太陽が1億2000万マイル離れた場所に移動すれば、私たちは皆凍死してしまうだろうと述べています。あるいは、もし太陽が地球から6000万マイル以内に近づけば、私たちは皆焼死してしまうでしょう。その熱によって植物さえも破壊されてしまうのです。

創造主がヨブに投げかけた問い——「その寸法を定めたのは誰か。もし知っているなら、教えてみよ。あるいは、その上に測り縄を張ったのは誰か」——は、どれほど意味深いものであったのでしょうか。これらは単なる戯言ではありません。人類のためにこの素晴らしい住まいを用意した創造主の知恵と愛を明らかにするために、創造主ご自身が意図して投げかけた問いだったのです。

どのように創造されたのか

聖書は、神がどのようにして創造を成し遂げたかについては説明していません。聖書は単に「神は天と地を創造された」と述べているだけです。しかし、科学者たちの間では、地球を構成する物質の起源がどうであれ、かつてその表面は高温の溶融状態であり、その後ゆっくりと冷却されて現在の姿になったという点で、概ね合意が得られています。

大まかに言えば、聖書はこのことを、地球が「形がなく、空虚であった」、

科学と創造

、すなわち形のない状態であったという簡潔な記述で説明しています（創世記1:2）。創世記の第1章が扱っているのは、地球がまだ生命にとって住みにくい状態であったこの時代からです。この創造の記録は、地球を現在の居住可能な状態へと導く過程における、6つの段階、日、あるいは時代について言及しています。

創造

地質学者たちは、この秩序立った発展過程を発見しており、創世記と同じ数の時間区分を設けてはいないものの、発展の各段階において何が起こったかに関する彼らの発見は、創世記と驚くほど一致している。科学者たちは、4つの主要な時代を提示しており、それらをさらに短い期間に細分化している。

科学者たちが定めた期間と創世記の「日」との間の調和について、あまり厳密にこだわる必要はない。何しろ、地球が生命を維持できるよう準備された過程に関する聖書の記述は、わずか31節の短い節にまとめられているのに対し、その偉大な業について科学者たちは数え切れないほどの書物を著してきたのである。この6つの大まかな区分は、敬虔な民が信仰を維持するために必要な情報を与えるために、創造主が言及すべきとみなしたすべてであったようだ。

第一日

最初の「日」の初め、神の御霊——すなわち神の全能の力——が「水の面の上を動いた」。

（創世記1:2）。ここで「動いた」と訳されているヘブライ語は、鳥が巣の上で抱卵するように「抱く」という意味である。周知の通り、抱卵の過程にはいくつかの段階がある。小枝を集めて巣を作り、その中に草やその他の柔らかい材料を敷き詰め、最後に雛が快適に過ごせるよう柔らかい羽毛を敷き詰める。その後、卵を産み、雛が孵るまで温め続けるのである。

大まかに言えば、これは、創造主の御霊、すなわち力が、やがて彼が地球のために思い描いていた無数の生き物、とりわけ人間のために住処が整えられるよう、地球の水の上を覆っていた様子を適切に表している。

その「覆う」という行為は、第一日の初め、「深淵の面には闇があった」時に始まり、第六「日」の終わりに、男と女として神のかたちに造られた人間が現れるまで続いた。創世記1:2、27-31

神の霊が水の上に漂い始めたとき、「深淵の面には闇があった」。これは陸と水が分けられる前のことであるため、地球の表面は広大な海で覆われていた。

神はヨブにこう尋ねられた。「海が、まるで母の胎から出てきたかのように溢れ出たとき、誰がそれを戸で閉じ込めたのか。わたしが雲をその衣とし、濃

科学と創造

い闇をそのおくるみとしたのは、いつのことか。」
ヨブ記38:8,9

神のこの問いは、海がどのようにして生まれたかを示唆しているのかもしれない。科学者たちは、地球の質量が冷却されるにつれて、外側に固体の地殻が形成されたという点で一致している。しばらくの間、この地殻は高温のガスを閉じ込めていた。あるいは、神の問いが示唆するように、「扉で閉じ込めていた」のである。

しかし、閉じ込められたガスは途方もない圧力を蓄積し、地表に点在する無数の小さなクレーターから「噴き出し」、その後冷却・凝縮して、熱い地表へと降り注いだのです。

こうして海は「生まれた」のであり、神はそれを母胎から出てくることに例えられたのです。

創造主は「光あれ」と言われ、この宣言によって「光があった」（創世記

1:3）。太陽は地球よりはるか以前に創造されたことが科学者によって明確に立証されており、おそらくそれが創造主の宣言で言及された「光」であったと考えられる。もっとも、当時は、後に見られるほどの明るさをもって、地球を取り囲む水蒸気やガスの雲を貫くことはなかった。

創世記1:4,5：「神は光と闇とを分けられた。神は光を『昼』と呼び、闇を『夜』と呼んだ。」闇と光を分けたのは、地球そのものであった。地球の太陽に

面した側は、地球の反対側の闇に比べて明るい状態となった。

24時間ではない

太陽の光が、地球を取り囲む厚い水蒸気の層をかすかに通り抜け始めたとき、神が地球の上に覆いかぶさっていた最初の時代が終わりを告げた。記録には、「夕べがあり、朝があった。これが最初の『日』である」と記されている。（創世記

1:5）。この記述で使われている「日」という言葉に惑わされる人々もいる。これはヘブライ語の「ヨーム（yowm）」の翻訳である。旧約聖書では、この言葉がしばしば12時間または24時間の文字通りの「日」を指す場合もあるが、聖書の著者たちはその用法をそのように限定していなかった。

出エジプト記13:10、レビ記25:29、民数記9:22、およびその他の箇所では、同じヘブライ語がとして「年」と訳されている。創世記40:4やヨシュア記24:7では「季節」と訳されている。

創世記4章3節や26章8節、その他多くの箇所では、「ヨーム（yowm）」は「時」と訳されている。これらの箇所は、このヘブライ語の意味が24時間の「日」に限定されないことをはっきりと示している。

さらに、聖書では「日」という語がより広い意味で用いられることがよくあります。イスラエル人が荒野で過ごした40年間は、「荒野における試練の日」と呼ばれています。

（詩編95:8）。イザヤ書は、キリストの地上における王国の時代を「日」と呼んでいます（イザヤ書11:10）。また、創世記2:4では、創造の全期間が「主なる神が天と地を造られた日」とされています。

したがって、ヘブライ語の「ヨーム」という語は、単に特定の出来事が起こったり、特定の業が成し遂げられたりする期間、季節、あるいは時代を指していることは明らかです。

「夕べがあり、朝があつた。これが第一の日である」と記されています。ここで「夕べ」と訳されているヘブライ語は、文字通り「夕暮れ」または「闇」を意味します。

神である著者が明らかに私たちに理解してほしいと願っているのは、それぞれの創造の期間が、薄暗く暗い始まりを持ち、各時代の業の完成が、輝かしい「朝」であつたということです。最初の「日」については、文字通り、暗闇の中で始まり、神の「光あれ」という御言葉をもって終わったというのが事実でした。

第二の日

第二の創造の期間に、地球の大気が形成されました。「神は言われた、『水の間に大空（広がり）をあり、それが水と水を分け隔てよ』」（創世記1:6）。この「広がり」による水の分離は、水の大半

が地上に残り、一方で膨大な量の水蒸気が大気中に浮遊した状態となったことを意味します。

科学者たちは、高温の地球から放出された残りの気体（その多くは凝縮して沸騰する水の海を形成した）が、大気を形成するために用いられたと説明しています。しかし、これらの気体は、後に創造される地球上の多くの呼吸する生き物たちに必要な、まさに適切な量の酸素を供給できるよう、神の知恵によって調整されなければなりませんでした。

預言者イザヤはこう記しています。「主は天を幕のように張り、住むための天幕のように広げられる」（イザヤ書

40:22）。地球を取り囲む広大な大気を、なんと美しく表現していることでしょう！

地球の大気は、すべての呼吸する生き物に酸素を供給するだけでなく、地球に水を供給する循環システムを可能にするという点でも、生命にとって不可欠です。太陽は海の水蒸気に変え、それが大気中に持ち上げられ、雨や雪として地上に降り注ぎます。

神はヨブにこう尋ねられました。「荒れ果てた地、誰も住まない砂漠に、誰が雨を降らせるのか。乾ききった大地を満たし、柔らかな草を芽吹かせるために、誰が雨を送るのか。雨には父があるのか。誰が露を生み出すのか。」ヨブ記 38:26-29

大気中には、地球に「降り注ぐ」準備が整った、何十億トンもの水が浮遊している。なんと素晴らしい灌漑システムであろうか！

これほどまでに、神なる建築家の知恵が明らかにされているだろうか！

そして、その記述はなんと簡潔なことか——「神は大空を造り、大空の下にある水と、大空の上にある水とを分けられた。そして、そのようになった。神は大空を『天』と呼んだ。」

（創世記1:7,8）。ここで「天」と訳されているヘブライ語は、「空気」と訳されるのと同じ語である。したがって、神が「大空」を「空気」と呼んだと言っても、同様に正しいことになる。

地球の大気の形成が完了すると、その時代は終わりを告げた。「夕べがあり、朝があった。これが二日目である。」創世記1:8

第三の日

第三の「日」、すなわち時代において、地球の陸地が現れた。「神は言われた、『天〔または空気〕の下にある水を一箇所に集め、乾いた地が現れよ』。すると、そのようになった。神は乾いた地を『地』と呼び、水が集まった場所を『海』と呼んだ。神はそれを見て、良しとされた。」創世記1:9,10

箴言8:29には、主が「地の基を据えられたとき、海に御定めを与え、水が御命令を越えてはならないとされた」と記されている。もし地球のすべての大陸を平らに削り取れば、地球の陸地全体が海面下1～2マイル

の位置にあることになるという。どうやら、これは創造の第三日以前の状況であったようだ。

神の定めにより、また神の力の支配の下で、当時まだやや柔らかい地殻であった地表に歪みが生じ始め、海底が深まり、大陸が隆起していった。ヨブ記に記されているように、「ここまでで、これ以上は進んではならない。ここが、お前の高慢な波が止まらなければならない場所だ！」（ヨブ記 38:10,11）

「あなたは、それらが越えてはならない境界を設け、それらが（かつて海がそうであったように）再び地を覆うことのないようにされた。」（詩編104:9）。また、第三の創造の期間に、神はこう言われた。

「地は草と、種を实らせる草木と……その種類に従って、その種をその中に持つものを、地の上に生じさせよ。そして、そのようになった。」（創世記 1:11）。このように、最も初期の植物相が記述されている。

ここで「草」と訳されているヘブライ語は、後に文字通りの「草」を指すようになったが、この本文では、より一般的な柔らかい植物を形容するために用いられているようだ。一部の聖書訳では、これを「植物」と訳している。

第三の創造の時代は、科学者が石炭紀およびペルム紀初期と呼ぶ時代を包含していた。この時期、まさに森と化すほどに繁茂した植物が、地球の石炭層の原料となったのである。

ここで一旦立ち止まり、「その種類に従って」という表現の深遠な意味に注目しよう。これは、すべての生物種が固定されており、ある種から別の種へと進化することはない、と主が述べている方法である。

各種には多くの変種が存在するかもしれない。例えば、バラや犬には多くの変種があるが、それらはすべてバラであり、犬である。ダーウィン自身も『種の起源』の中で、次のように率直に認めている。「熟練した観察者たちのあらゆる努力にもかかわらず、ある種が別の種へと変化した事例は一つも記録されていない。」

今日知られている高等植物について、ダーウィン氏はジョセフ・フッカー卿への手紙の中で、「最近の地質学的な時代におけるすべての高等植物の急速な発達は、我々の判断の及ぶ限り、忌まわしい謎である」と述べたと伝えられている。

（『植物の進化』42ページ、D. H. スコット博士、M.A., L.L.D.）。これがダーウィンにとって「忌まわしい」謎であったのは、単にそれが彼の進化論を否定するものであったからに他ならない。

科学者たちは概して、まだ進化論を放棄する準備はできていないが、岩石から発見された地質学的記録に関しては、最も原始的な動植物から最も高度なものに至るまで、その全過程にわたり説明のつかない空白が存在することを認めている。言い換えれば、多くの「ミッシングリンク」が存在するのであり、

これはウェルズ、ハクスリー、ダナといった著名な科学者たちによっても率直に認められている。

一部の科学者は「急速な移行」や「不連続性」について言及しており、これはある種が別の種へと進化したという証拠が存在しないことを意味している。

ウェルズやハクスリーはこうした困難を認識していた。しかし、彼らは純粋な想像力に基づいて「架け橋」を築こうとし、それらが「暫定的な」ものであり「推測的」であることを認めつつも、その作業を進めた。

地質学者たちは、この推測に基づく「架け橋」が、少なくとも500

百万年という時間的ギャップを埋めていると推定している。この点で残念なのは、これらの著名な科学者たちの著作を読む一般の読者が、岩石の記録によって事実として確立されたものと、彼らの推測に基づく「架け橋」とを区別できていないことである。

これらの考えを、フランスの教授E.

ペリエが著書『歴史以前の地球』（The Earth Before History）の75ページに記した引用文で要約することができよう。彼は次のように書いている。「これほど多くの有機的形態が比較的急激に現れたことは、進化論に反する証拠と見なされることがあった。

また、直前の地層に保存されていた古い動植物が完全に消滅した後、ある地質層において新しい動植物が突然出現したことが証明されている。」ペリエは

、これが「独立した創造を支持する反論の余地のない論拠と見なされてきた」と指摘している。

第四日

4日目は、太陽、月、星に関する記述でした。

聖書の記述はこうである。『神は言われた、『天の大空に光があり、昼と夜とを分け、しるしとなり、季節や日や年を示すものとなれ……』。神は二つの大きな光を作られた。大きな光は昼を治め、小さな光は夜を治めるためであり、また星も造られた。』
創世記1:14-16

この記述をざっと読んだ人は、この時期に太陽と月が創造されたという印象を容易に抱きがちですが、実際はそうではありません。太陽と月は、「神が天と地を創造された」という「初めに」の時点で創造されました。それらは「天」の一部なのです。創世記1:1

ここで「造られた」と訳されているヘブライ語は、これよりもはるかに広い意味と用法を持っています。詩編104:19では「定められた」と訳されています。

神は「月を季節のために定められた。太陽は、その沈む時を知っている」。第四日における神の御業は、太陽と月を創造することではなく、それらを「昼と夜を治める」ために定め、またそれらが「しるし、季節、日、年」となるようにされたことでした。

先に述べたように、神が「光あれ」と言われた最初の創造の時代に、地球を取り囲んでいた闇の覆いをかすかに貫いたのは、太陽の光であった。

明らかに、第四の創造の「日」以前にも、ある程度の太陽光が地球に届いていた。なぜなら、第三の時代に生えた植物にはそれが必要だったからだ。しかし、当時、太陽と月は季節を生み出すという意味で「支配」していたわけではない。その証拠として、石炭層を形成するために堆積した巨大な木々には、その成長の年を示す年輪が一切見られない。

第五の日

第五の時代は、海洋生物と「地の上を飛ぶ鳥」を生み出すことに捧げられた（創世記 1:20）。聖書には、神が「大きな『鯨』と、水の中からその種類に従って豊かに生み出された、動くすべての生き物」を創造したと記されている（創世記 1:21）。

聖書では「クジラ」ではなく「海の怪物」と記されている。ストロングのコンコーダンスによれば、このヘブライ語は「陸の怪物」と訳すこともできるという。

創世記1:21は、おそらく科学者たちが「恐竜」、「ディプロドクス」、「ティラノサウルス」（巨大なトカゲを意味する）といった名前を付けた、あの巨大な動物たちを指しているのだろう。

科学者たちは、これらの怪物は陸上でも生きられた

ものの、その莫大な体重ゆえに、水中で移動する方が容易だったと示唆している。なぜなら、水はその体重を支える助けとなるからである。

「翼のあるすべての鳥」（創世記1:21）という表現は、羽毛のある鳥類に限定される必要はありません。地質学者たちは、この時代には羽毛を持たない巨大な翼のある生物が存在し、その翼の構造はコウモリのそれに多少似ていたことを発見しています。

この時代の巨大なトカゲであれ、海にのみ生息していた生物であれ、あるいは空を飛ぶ羽毛のある鳥や羽毛のない鳥であれ、それぞれの種は「その種類に従って」創造された。これは地質学者たちによっても裏付けられており、彼らは「岩石の書」に見られる証言から、これらの種はいずれも、進化の階段を登ってきたという証拠なしに、突然現れたことを率直に認めている。

第六の日

第六の「日」の終わりに、神はご自身の姿に似せて人を創造された。ふさわしいことに、人間の必要を満たすことになる陸生動物も、この時期に創造されたのである。

植物は第三の「日」に現れたが、新しい植物種は引き続き出現し、花を咲かせる木や果樹は第六の日に創造された。地質学者たちは、花を咲かせる植物や木々の出現とともに、ミツバチも現れたことを突き止めている。この時点で初めて

、受粉のためにミツバチや他の昆虫が必要とされ、それ以前には、それらには適切な食料供給源がなかったはずである。

創造主は、昆虫が食物を求める「自然な」欲求によって、自動的に開花植物や樹木の繁殖過程に奉仕するよう仕組まれたのである。

神の地上の創造の集大成は人間でした。創造の設計者は、人間のために地球とそのすべての備えを設計されました。人間の創造に関する真理を明らかにするにあたり、聖書の著者は、いわば舞台裏へと私たちを導き、神が御子に語りかける声を聞かせてくれます。創世記1章26節：

「われわれは、われわれの像に、われわれに似せて、人を造ろう。そして、彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、全地、そして地を這うすべての這うものを支配させよう。」

これまでの五つの「日」にわたって神の力が「醸成」してきたすべての業の偉大な目的が、今まさに実現しようとしていることを知ることは、父と子双方にとって、疑いなく大きな喜びであったに違いない。それまでの創造の業がいかに素晴らしかったとしても、地の王として任命されるにふさわしい、創造主の代表者はまだ存在していなかったのだ。

「神は人を男と女に造られた。」（創世記1:27）。この簡潔な事実の記述は、第2章で詳しく述べられている。ここでは、まず男が創造され、その後、女が創造されるまでに一定の時間が経過したこ

とがわかる。男に関して、
の記録には次のように記されている。「主なる神は、地の塵で人を形造り、その鼻の穴に命の息を吹き込まれた。こうして、人は生ける魂となった。」創世記 2:7

ここには、人間の解剖学に関する二つの科学的真理が示されている。(1) 人間の生体組織は、地球に本来存在する化学元素から構成されている。(2) 人間は、肺に取り込んだ酸素によって生きている。レビ記 17:11 には、「肉の命は血にある」とある。肺に取り込まれた酸素が血液によって体の隅々まで運ばれ、それによって体が生き続けられることが、現在では知られています。この知識が、人間による発見よりもはるかに前に聖書に記されていたとは、なんと素晴らしいことでしょう！

「人は生ける魂となった。」

「生ける魂」とは、生き物である。創世記 1 章 21 節と 24 節では、同じヘブライ語の単語が「生き物」と訳されており、これは下等動物を指している。このような翻訳の一貫性の欠如は、翻訳者たちが「不滅の魂」という伝統を支持したいという願望を反映しているのかもしれない。この伝統によれば、人間は体のどこかに破壊不可能な命の火花を秘めており、体が死ぬとそれが抜け出し、死を乗り越えて生き続けるとされる。

「生ける魂」という表現からは「不滅の魂」という伝統が全く示唆されていないにもかかわらず、翻訳

者たちは、下等動物を指す際に用いた「生き物」という表現よりも、この表現の方が響きが良いと考えたのは明らかである。

もし彼らが両方の場面で「生ける魂」または「生ける生き物」という語のいずれかを使用していたならば、中世の聖書翻訳を研究する人々は、「不滅の魂」という伝統が聖書では全く教えられていないことを、はるかに容易に理解できたはずである。

そうすれば、彼らは『伝道の手紙』3章19～21節に述べられている単純な真理を受け入れる傾向が強かっただろう。そこではソロモンが、人と獣は同じ息を持っており、「一方が死ぬとき、もう一方も死ぬ」と説明している。

創世記2章8節、9節には、創造主が人間に対して示した愛に満ちた配慮について、さらに詳しい記述があります。「主なる神は、エデンの東に園を植え、そこに、ご自身が形造られた人を置かれた。主なる神は、地から、目には美しく、食べるのに良いあらゆる木を生えさせ、また、園の中央には、いのちの木と、善悪を知る木も生えさせた。」

人は神のかたちに造られたため、人生のより高次なものを鑑賞することができた。神の御業はすべて完全であり、したがって真の光に照らして見れば美しいものだが、創世記の冒頭の一章では、神の創造の美しさについては何も語られていない。その理由は明らかである。

下等な動物たちは美しさを理解することができませんでした。しかし、人が創造された後は事情が異な

りました。今や、食物の必要性よりも先に、美しさに重点が置かれるようになったのです。人は単に食べるためだけに生きるようには造られていなかったのです。それゆえ、創造主はエデンの園に「目を樂しませる」木々を備えられたのです。

誘惑と不従順

アダムは創造主の像に似せて造られ、地の王となるべき存在であったため、自分の支配する領域を知る機会が与えられました。彼には、「すべての家畜」と「空の鳥」、そして「野のあらゆる獣」に名前をつける責任が課せられました。（創世記 2:19,20）。この作業を進める中で、アダムにとってふさわしい伴侶、すなわち「助け手」がいなかったことが明らかになった。そこで、神はご自身の知恵に従って、エバを創造された。創世記 2:18,21-25

エバが創造されて間もなく、悪魔サタンが蛇を通じて彼女に近づき、罪の罰としての死について神が言われたことに異議を唱えた。「あなたがたは決して死ぬことはない」とサタンはエバに言い、さらにこう付け加えた。「神は、あなたがたがそれを食べるその日に、目が開かれ、善悪を知る神のようになることを知っているのだ。」創世記3:1-5

神は、その無限の知恵をもって、アダムとエバの自由な選択に一切干渉することなく、彼らがどのような道を選ぶかをあらかじめ知っておられました。彼らが不従順になることを知りつつ、神はそれを許さ

れました。神は、それによってのみ、人類が善悪について実践的な知識を得ることができると知っておられたのです。

あらかじめ警告されていた通り、アダムの不従順は死という罰をもたらし、それは遺伝によって彼の子孫すべてに受け継がれた。それは多くの悲しみと苦しみをもたらしした。しかし、この経験を通じて、人類は創造主の律法に背くことの恐ろしい結果を学んでいる。

しかし、神は依然として人間という被造物を愛しておられます。「神は悲しみを与えながらも、憐れみも示される……神は、人の子らを喜んで苦しめることはなさらないからである。」（哀歌 3:32,33）

神は人間という被造物を愛しておられるため、主イエス・キリストを通して彼らに贖いを備えてくださいました。それゆえ、パウロは次のように記しています。「人が死をもたらししたように、人が死者の復活をもたらししたのです。アダムにおいてすべての人々が死ぬのと同様に、キリストにおいてすべての人々が生き返るのです。」コリントの信徒への手紙一 15:21,22

人類を地上での命へと回復させるこの業は、キリストの御国の千年の間に成し遂げられる。マタイによる福音書 19:28；ヨハネの黙示録 20:6

科学と創造

新しい創造

一方、イエスの初臨を皮切りに、別の創造の業が進められてきました。私たちはこれを「新しい被造物」と呼ぶことができます。使徒パウロは次のように記すことで、その手がかりを私たちに与えてくれました。「だれでもキリストにあるなら、その人は新しい被造物です。古いものは過ぎ去り、見よ、すべてが新しくなったのです。」

（コリントの信徒への手紙二

5:17）。イエスご自身が、神聖な命の次元において「新しい被造物」となられました。そして、神の御心を行うことに全身全霊を捧げる真の信徒たちは、自分たちもまた、イエスと共に、また天の父と共にいるために高められることが約束されています。ヨハネによる福音書 14:2,3；17:24；ヨハネの黙示録 3:21；ペトロの手紙二 1:4

「義の太陽」の昇りによって、新しい日が幕を開けるでしょう。

（マラキ4:2）。「義の太陽」とはキリストのことであり、その忠実な信者たちはキリストと共にいることになる。彼らは「最初の復活」において死からよみがえらされ、キリストと共に生き、支配することになる。（ヨハネの黙示録20:4,5）。これらは「義人」であり、「父の御国で太陽のように輝く」者たちである。マタイによる福音書13:43

その間、人間には従順の利点を学ぶ機会が与えられる。

やがて、すべての人が死の眠りから目覚めることになる。その時、悪との経験を通じて得た知識（
）を武器とし、キリストを通して用意されたいのちの恵みを受け入れ、その時点で施行されている王国の律法に従う者たちは、人間の完全な状態へと回復される。そうして、地の王である人間は、創造主の御顔の光の中に永遠に住み、平和と健康、そして永遠のいのちという祝福を享受することになる。